

今週の為替相場見通し(2022年12月26日)

総括表		先週の値動き			今週の予想レンジ
		注	レンジ	終値	
米ドル	(円)		130.58 ~ 137.46	132.84	131.00 ~ 134.50
ユーロ	(ドル)		1.0573 ~ 1.0659	1.0615	1.0570 ~ 1.0690
(1ユーロ=)	(円)		138.81 ~ 145.81	140.99	138.50 ~ 143.50
英ポンド	(ドル)		1.1993 ~ 1.2241	1.2053	1.1800 ~ 1.2200
(1英ポンド=)	(円)	*	158.60 ~ 167.03	160.08	156.50 ~ 161.50
豪ドル	(ドル)		0.6629 ~ 0.6767	0.6714	0.6580 ~ 0.6900
(1豪ドル=)	(円)	*	87.03 ~ 92.02	89.17	86.90 ~ 92.00

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1. 米ドル

金融市場部 グローバルFIチーム 木村 優太

(1)今週の予想レンジ: 131.00 ~ 134.50 円

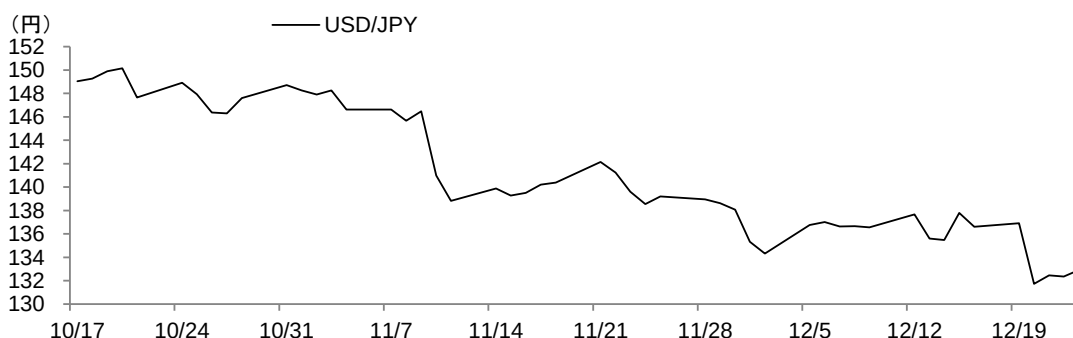
(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のドル/円相場は日銀政策決定会合の結果を受けて大きく円高が進行した。週初19日のドル/円は「政府と日銀が共同声明を改定する方針を固めた」との報道が週末に発表されていたことを受けて前の週より円高の水準である136円付近でギャップオープンしてスタート。ただし松野官房長官がその報道を否定したことからドルが買い戻され、米長期金利上昇も相まって週高値の137.15まで上昇した。20日は東京時間に発表された日銀政策決定会合にて、イールドカーブコントロール政策を一部見直し、長期金利の許容変動幅を±0.5%程度へ拡大することが伝わり、突然の金融引き締めへの転換からドル/円は133円前半まで急落。黒田日銀総裁の会見にて金融緩和と政策継続の姿勢が強調されるも円高の流れは止まらず8月以来の安値である130.58まで一時下落し、引けにかけて131円後半まで戻す。21日は前日の急落からの反動で132円後半まで買い戻される場面があるも、新規材料に乏しいなか132円半ば近辺での方向感ない推移となる。22日は日米金利差縮小からドル売りが強まり131円後半まで下落するもじりじりと水準を戻し、海外時間には米7-9月期GDP(確報)などが上方修正されたことで132円後半まで上昇。23日も132円後半での方向感のない推移が継続。米11月個人所得や米11月個人消費支出コアデフレーターが予想を上回ったことで米金利上昇と共に133円前半まで上昇。その後はクリスマス休暇を控えて取引を手仕舞う動きとなり、132.80近辺での越週となった。

今週と来週のドル/円相場は年内の中銀イベントが終了し、クリスマス休暇に伴い海外参加者も少なくなるため流動性が極端に低下するなか、年末需給によるフロー主導での値動きが想定される。ただし、先週の日銀政策決定会合にてこれまで否定されてきた長期金利の許容変動率幅拡大が突然行われたため、円金利相場は不安定な状況となっている。そのため円安方向は先週の下落からの自律反発で、先週と同様のじりじりと戻す形が基本線と考えられる一方、円高方向は警戒感も強いなかで急落に繋がりやすい。流動性が低いうえに不安定な相場環境である状況下、投機筋もポジションを取りにくいことから基本的には横ばいでの推移を見込むが、特に円高方向への相場急変の可能性には留意したい。

(3)先週までの相場の推移

先週(12/19~12/23)の値動き: 安値 130.58 円 高値 137.46 円 終値 132.84 円



(資料)ブルームバーグ

2. ユーロ

市場営業部 為替営業第二チーム 上遠野 暁洋

(1) 今週の予想レンジ: 1.0570 ~ 1.0690 138.50 ~ 143.50 円

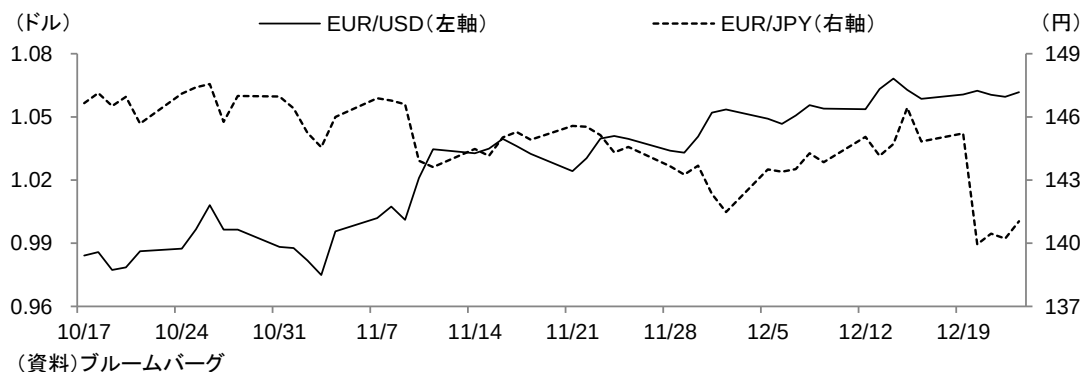
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のユーロ/ドル相場は、1.06を挟んで上下に振れつつ方向感には欠ける展開となった。週初19日、1.0585レベルでオープンしたユーロ/ドルは、独12月IFO企業景況感指数が市場予想を上回ったことや、デギンドスECB副総裁の来年以降も+50bp利上げ継続を示唆する発言を受けてユーロ買いが強まり一時1.06台後半まで上昇。しかし、その後の米金利が上昇する動きに1.05台後半まで押し戻される動きとなった。20日、ユーロ/ドルは日銀のサプライズ的なイールドカーブコントロールの許容変動幅の拡大発表を受けて上下するも、対円でのドル売りが優勢であったこともあり1.06台前半まで上昇する展開となった。21日は、独1月GfK消費者信頼感が市場予想を上回ったことが好感されたものの、対円でのドル買い戻しの動きが波及しユーロ/ドルの上値は重く1.06付近に反落。22日は、米金利低下を背景に再び週高値を試し1.0659の週高値まで上昇するもレジスタンス1.0660をブレイク出来ず、その後の米7-9月期GDP(確報値)が堅調結果をとったことを受けてドル買いが優勢となり、ユーロ/ドルは1.0573と週安値まで下落。もともと売りの巡りは反発し1.06台を回復。23日、米金利上昇が一服しユーロ買い戻しが優勢となる中、ユーロ/ドルは1.06台前半まで上昇。その後は、欧米勢の週末連休を控えた慎重ムードに上値は限定的となり、1.0615レベルで越週した。

今週と来週のユーロ/ドルは底堅い展開を想定。クリスマス休暇後から年末年始にかけて主要イベントの発表は少なく新規手掛かりには乏しいものの、12月ECB会合以降のラガルドECB総裁やECB高官のタカ派スタンス(先週はデギンドス副総裁からも+50bp幅での利上げ継続を支持する発言の他、カジミールスロバキア中銀総裁の「安定したペースで引き締める必要性」、ミュラーエストニア中銀総裁の「これまでの利上げでは不十分」とする発言はあった)が短期的なユーロ買い材料としてサポートか。大幅利上げはスタグフレーションリスクを増大させ、深刻さを増すウクライナ情勢もセンチメントを悪化させるものの、目下、逆イールドが進行し本格的なリセッション警戒から利上げペースの一段減速および来年中の利上げ停止が予測されるFRBと対比から対ドルでのユーロ買いが優勢か。なお、来年1月6日(金)にはユーロ圏12月消費者物価指数(HICP)の発表を予定。前回から小幅鈍化見込みも、依然+9%を超える高水準が予想されECBの利上げ継続路線サポート材料とみる。年末年始はイベントも少なく流動性も乏しい中突発的な値幅には十分警戒しつつもユーロは底堅い展開を想定しておきたい。その他主な経済指標として、2日(月)ユーロ圏12月製造業PMI(確報値)、3日(火)独12月消費者物価指数(速報値)、4日(水)ユーロ圏12月サービス業PMI(確報値)等を予定。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(12/19~12/23)の値動き: (対ドル) 安値 1.0573 高値 1.0659 終値 1.0615
(対円) 安値 138.81 高値 145.81 終値 140.99



3. 英ポンド

欧州資金部 鶴田 涼平

(1) 今週の予想レンジ: 1.1800 ~ 1.2200 156.50 ~ 161.50 円

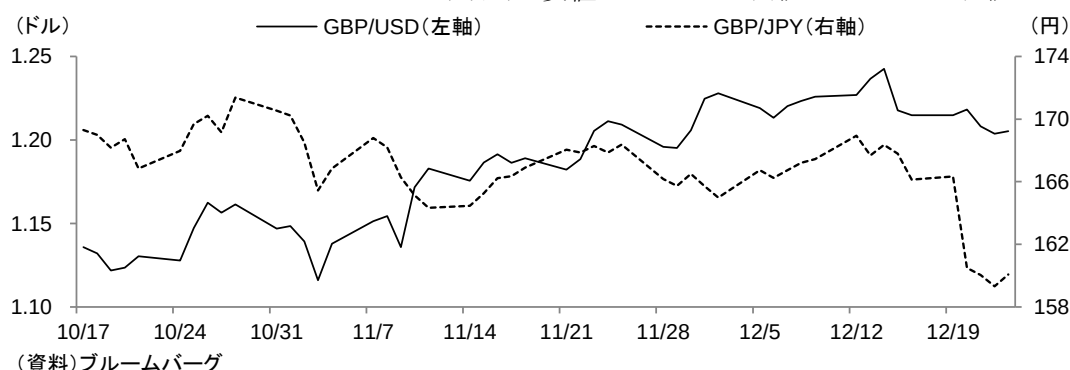
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の英ポンド相場は、対ドル対円ともに下落する展開。週初19日、対ドルで1.21台半ば、対円で166円付近でオープン。特段目立った材料が見当たらない中、欧州時間に欧州通貨主導でドル売りが進み、英ポンドは対ドルで週高値となる1.2241まで一時上昇。ただ、米利上げ局面の長期化が意識される中で前週からドル買い優勢地合いが続く状況下、米金利の上昇に合わせてドル買いが強まり、1.21台半ばまで反落。対円では、ドル主導の相場展開に166円近辺で横ばい推移。20日、日銀による予想外のイーールドカーブコントロール許容変動幅拡大を受けてドル円が急落、円主導でドル売りが進み英ポンドは対ドルは一時1.22台まで急騰。ただし、週高値近辺で推移していたポンド円が166円台後半から160円台後半まで急落する展開にポンドドルも結局1.20台後半まで反落。その後、対ドルで下げ幅を回復するも対円では週安値近辺となる158円台後半まで続落。21日、特段目立った材料なくもポンドは欧州時間に入って上値重く推移する中で一時1.20台半ばまで下落。22日、この日発表された英7~9月期GDP(確報)は市場予想比下振れ、前日に続き欧州時間から英ポンドは上値重く推移する中、米新規失業保険申請件数が市場予想比良好な内容となると、一般的にドル買いが強まり、英ポンドは対ドルで週安値となる1.1993まで下落。23日、クリスマス休暇ムードが漂う閑散相場の中、英ポンドは対ドルで動意に乏しく1.20台前半から後半でレンジ推移。対円では、ドル/円の上昇に伴って159円台前半から160円台前半まで上昇。その後、対ドルで1.20台半ば、対円では160円近辺で週末を迎えた。

今週と来週の英ポンド相場は上値の重い展開を予想。先々週の米欧中央銀行による金融政策決定会合では、それぞれ+50bpの利上げが決定され、更なる利上げと利上げ局面の長期化が示唆される内容となり、引き続きのタカ派姿勢が確認される内容となった。同週に行われたBOEによる金融政策決定会合でも同じく+50bpの利上げが決定されたものの、早くも利上げペースの減速を支持する声が出ていたことに加え、ターミナルレートの引き下げも示唆されるなど、米欧対比ややハト派色を感じる内容となった。再来週の後半に米重要経済指標の発表を予定しているものの、それまで特段目立ったイベントもない中、こうした中央銀行による金融政策スタンスの差異を反映する格好に英ポンド相場は上値の重い推移が基本線と考える。事実、足もとで上値重く推移していたユーロ/ポンド相場は今月の金融政策決定会合後に明確に上昇トレンドを形成しており、欧英中銀の政策スタンスの温度差が反映したものと考えている。対米中銀とも同様の温度差が存在する中、足もとで低下基調にあった米金利は再度上昇基調に転じており、英ポンドが対ドルで堅調推移する展開は考えにくい。またテクニカル的にも、日足の200日移動平均線を割り込んで、サポートラインからレジスタンスに変わろうとしているように見える。年末年始の市場参加者が少なく、流動性も薄い中、フロー主導で一時的な上昇はあろうが、各国中央銀行の政策スタンスの温度差を反映する格好に、英ポンド相場は上値の重い推移が基本線。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(12/19~12/23)の値動き: (対ドル) 安値 1.1993 高値 1.2241 終値 1.2053
(対円) 安値 158.60 高値 167.03 終値 160.08



4. 豪ドル

アジア・オセアニア資金部 シドニー室 川口 志保

(1) 今週の予想レンジ: 0.6580 ~ 0.6900 86.90 ~ 92.00 円

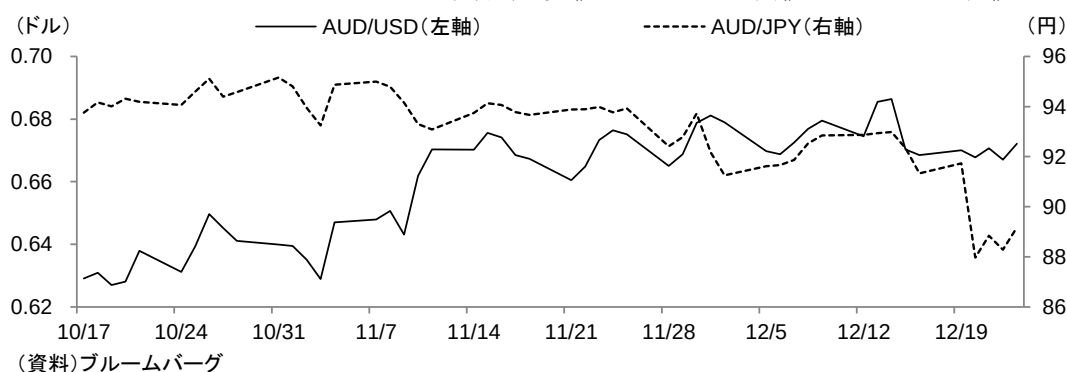
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の豪ドル相場は0.6690でスタート後、ホリデームードで閑散とする中、週を通して0.6629～0.6767の比較的狭いレンジで振幅し、金曜NY引けは0.6714で越週した。月曜は豪ペニー・ウォン外相が火曜に北京を外交訪問するとの報道で僅かに上昇するも、1日を通しては50pips程度のナローレンジで推移した。火曜は日銀金融政策決定会合で長期金利誘導水準の許容変動幅拡大が発表され、サプライズを受けて円買い、米ドル売りの流れから豪ドルは0.6690近辺から50pips上昇し、その後は豪ドル円の売りに引っ張られる形で0.6630近辺まで下落した。豪ドル円は一時87.03まで下落。豪ドルはその後上下を繰り返し、NY引けは0.6680近辺となった。この他、発表された12月RBA会合の議事録では政策引き締めサイクルを今月停止する事が検討されたものの、それを正当化する経済データが得られなかった為見送ったとされていた。加えて、追加利上げを見込んでいるが、将来の利上げ幅とタイミングは引き続き今後のデータで決まると繰り返されていた。水曜は特段市場材料の無く70pips程度の比較的ナローな振れ幅で推移。木曜は0.6710近辺でスタート後、中国が入国者隔離期間を来月から短縮する計画を発表した事でロンドン入りにかけて0.6767まで上昇し、NY引けにかけては米7-9月期GDP(確報)などが上方修正されたことが上振れしたことで追加利上げ警戒感が広がり、米株が下落、米ドル買い戻しの流れから0.6650まで下落した。金曜は米11月個人消費支出コアデフレーターが減速したことに加え、米12月ミシガン大学短期インフレ期待が低水準となった事でインフレ減速を好感し、株は上昇、米ドル売りとなった。この流れを受けて豪ドルは0.6720近辺まで上昇し、越週した。

今週と来週の豪ドル相場は底堅い動きを予想する。FRBは直近のFOMCにおいても利上げ継続姿勢を表明しているが、市場はそれを徐々に材料視しなくなっており、ドットプロットが上方修正された事よりもどちらかと言えば利上げ減速の政策シフトに対して敏感に反応している。一方、RBAは12月会合にて引き締めサイクルの停止が検討されたものの、国内経済データは依然として堅調に推移しており、現在の逼迫した雇用環境下ではインフレ圧力は未だに燃える。また、日銀ショック後、米債市場では国債ETFから約1600億円以上が流出しており、米国債の国外での最大保有者が日本人投資家であるため、一部では日本から米債市場へ資金流入が減少する可能性が危惧されている。これら足元のトレンドを踏まえると来年年初にかけては米ドル売り、円買い、豪ドル買いの傾向にあり、2022年のリバースフローが続くと推察する。市場の焦点は2国間金利差でなく、中銀の政策軌道修正へシフトしてきているが、その政策軌道を占う意味でも1月4日(水)発表のFOMC議事要旨(12月会合分)、並びに1月6日(金)発表の米12月雇用統計には注意を払いたい。

(3) 先週までの相場の推移

先週(12/19～12/23)の値動き: (対ドル) 安値 0.6629 高値 0.6767 終値 0.6714
(対円) 安値 87.03 高値 92.02 終値 89.17



当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。